高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験による学びの定量化と内容分析

新川朋子*・寄　ゆかり*

College and High School Cooperation Project: A Content Analysis of Learning Quantify from the Program in the Early Childhood Care and Education Experience

Tomoko Niikawa, Yukari Yori

【キーワード】高短連携事業，保育基礎講座，保育体験，学びの定量化，内容分析
College and High school Cooperation Project, Program in Early Childhood Care and Education, Early Childhood Care and Education Experience, Learning quantify, Content Analysis

Ⅰ．問題の所在および研究目的

近年，大学，短期大学など私学の高等教育機関を取り巻く環境は少子化や核家族の進行など社会の影響を受けて大きく変化している．そのような中，大学，短期大学は，地域を支える専門人材の育成という社会的に大きな役割を担っており，各地域からの期待が寄せられている．

文部科学省（2013）は，高等学校と大学との連携の状況に関する高校生が大学教育に触れる機会の提供（平成23年度）を調査し，報告している．その内訳として，オープンキャンパス等698校，大学教員が高校へ出向き行う講演等552校，高校生を対象とした体験授業の開催497校が挙げられている．また，大学において行う高校生を対象とした，大学教員による講演等303校，大学教員が高校へ出向き定期的に行う講義または授業280校，高校生を対象とした公開講座の開催203校，大学の通常授業の履修196校であったことを明らかにしている．

九州では，高等教育力の地域間格差の拡大に繋がる危機を回避するため，短期大学コンソーシアム九州を設置し，短期大学間の連携・共同による教育を展開し，地域に密着した中堅人材の養成を行っている（第7期中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ，2014）．

そして，1つの大学・短期大学では実施が困難あるいは負担が大きい教育の改革・改善など

所属および連絡先
＊大阪千代田短期大学

の取り組みを，地域や分野で複数の大学・短期大学が連携しながら独自のネットワークを構築し実施している（大学間連携 GP 事務局代表校佐賀女子短期大学，2014）.

大阪千代田短期大学においては，法人内における円滑な内部進学を行うための進学指導について検討がなされ，短期大学，高等学校における高等教育の充実を図るための高短連携事業が実施されている．大阪千代田短期大学幼児教育科では，長年に亘って地域に密着した幼稚園教員養成と保育士養成といった地域を支える専門的人材の育成を行ってきた．また，大阪千代田短期大学幼児教育科における高短連携事業においては，保育体験による体験型の学びを取り入れた保育基礎講座を計画し，入学前における教育活動を展開している.

体験型の学びを取り入れた保育講座として学生が保育現場で学ぶ機会は，さまざまな保育士・教員養成課程での保育実習外においても設けられている．春高ら（2014）は，九州女子大学人間発達学専攻で展開している取得免許種毎の学生ボランティア事業「グリーンティーチャー事業」の一つである幼稚園・保育所ボランティア事業の取り組みについて現状の分析と課題の検討を行っている．その中で，アンケート調査の結果から学生の本事業に対する満足度は高く，一定の学習成果があるとしている．しかし，その一方で，指導体制の充実と低意欲の学生に対する支援の課題があったことを明らかにしている．また，木内ら（2013）は，東京都内の大学を対象に保育士，教員養成課程における実習外教育について調査し，実習外教育の有効性，位置づけ，実施形態を検討し，依頼側の大学と受け入れ側の教育現場との間に，実習外教育活動に対する認識の差異があったことを報告している．しかし，木内ら（2014）は，保育・教育職を目指す学生の意識が保育士・教員養成課程における実習外教育への参加を通して，現職の実践者の視点へと変化し，具体的な課題を捉えた上で解決策の提案をする記述が見受けられるようになるとしている.

そこで，本研究においては，高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験による学びの定量化とそれに基づく内容分析を行うことにより，今後の高短連携事業による教育支援を充実させるための示唆を得ることを目的とする.

Ⅱ．方　法

1．調査対象者

本研究の調査対象者は，大阪千代田短期大学幼児教育科における高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験を行った高校 3 年生 4 名（女性 3 名，男性 1 名）であった.

2．調査期間

2015 年 4 月 16 日～2015 年 7 月 2 日

3．調査対象の授業概要

本研究の調査対象である高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験の概要を表1に示した．

表1　高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験スケジュール

回数	月日	時　間	内　　容	場　所
1	4.16.	10：45〜12：35	オリエンテーション：講座内容の概要説明，うた，手遊び，幼稚園と保育所の違い，保育記録の書き方	短期大学講義室
2	4.23.	10：45〜12：35	保育基礎講座1：うた，子どもの発達，手遊び，漢字テスト	短期大学講義室
3	4.30.	10：45〜12：35	保育基礎講座2：うた，子どもの発達，手遊び	短期大学講義室
4	5. 7.	10：35〜12：15	保育体験：4歳児，5歳児クラス見学 保育体験のまとめ：評価と反省，アンケート記入	保育園，高等学校会議室
5	5.14.	10：45〜12：35	保育基礎講座3：うた，保育記録の書き方	短期大学講義室
6	5.21.	10：45〜12：35	保育基礎講座4：子どもの発達，絵本の導入・選択の方法，絵本の読み方	短期大学図書室
7	5.28.	10：45〜12：35	保育基礎講座5：うた，子どもの発達，絵本の選択，絵本の読み方	短期大学図書室
8	6.11.	10：45〜12：35	保育体験：4歳児，5歳児クラス見学 保育体験のまとめ：評価と反省，アンケート記入	保育園，高等学校会議室
9	6.18.	10：45〜12：35	保育基礎講座6：うた，保育記録の書き方	短期大学講義室
10	6.25.	10：45〜12：35	保育基礎講座7：音楽活動，楽器遊びうた	短期大学講義室，音楽室
11	7. 2.	10：35〜12：15	保育基礎講座8：保育基礎講座と保育体験のまとめ	高等学校会議室

4．授業時に実施したアンケート概要

2015年4月より，4名の学生は短期大学にて3回の保育基礎の授業を受講した後，4回目の授業において保育園で午前中保育体験した．その後，保育体験のまとめとして高校の教室で「実際に保育の現場で学んだことの成果」についてのアンケートを4名に実施した．アンケートの質問項目は，伊藤ら（2005）による「子育て支援ボランティア活動における大学生の学びの過程を分析し，学びの内容を分析するための基準カテゴリ」を参照し，「①観察して学んだこと，②子どもの成長をともに喜んだりして学んだこと，③自分なりの課題意識を持つようになったこと（もっと〜を知らないといけないなど），④自分なりの試みとそれを評価するようになったこと（〜をしてみたらうまくいった），⑤自分なりの役割意識が広がったこと（〜もできるように頑張ろうとおもうなど）⑥将来の保育分野への職業生活や進路選択への興味・関

心の高まりである」から構成される調査項目とした．

その後，4名の学生は保育基礎の授業を3回受講し，再び8回目の授業において保育園で午前中保育体験を行った．保育体験終了後，前回の保育体験と同じ質問項目で高校の教室でアンケートを4名に実施した．

5．データの検討方法

データの検討方法として，まず，保育基礎講座と保育体験による学びの概要を把握するため，学生のまとめた自由記述レポートをコーディングした後に，テキストマイニングの分析手続きに基づいて，同種の語を置換した．そして，閾値2以上の構成要素を特定し，自由記述式のテキストデータを定量化した．その後，共起するカテゴリを有向レイアウトで表示して視覚化を行い，学びの概要を把握した．なお，集計，分析ソフトには，Microsoft office Excel 2013及びIBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0を使用し，コーディングにおいては保育学，心理学，社会福祉学の研究者による協議を行った．

次に，把握した学びの概要に基づいて，アンケート質問項目（①観察して学んだこと，②子どもの成長をともに喜んだりして学んだこと，③自分なりの課題意識を持つようになったこと（もっと〜を知らないといけないなど），④自分なりの試みとそれを評価するようになったこと（〜をしてみたらうまくいった），⑤自分なりの役割意識が広がったこと（〜もできるように頑張ろうとおもうなど）⑥将来の保育分野への職業生活や進路選択への興味・関心の高まりである）における項目ごとの逐語記録データに対する内容分析を行った．

6．研究の倫理的配慮

高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験を受講しアンケートの回答をした生徒に対しては，プライバシーの漏洩がないように厳重に管理するとともに，結果を定量化し，データ解析して，今後の教育・研究へ活用するという研究の趣旨及び目的説明を口頭で行って了承を得た．

Ⅲ．結果及び考察

保育基礎講座前半と保育体験1回目の学びの特徴を把握するため，自由記述式のテキストデータを定量化したところ，子ども20（83.3%），保育者6（25.0%），自分5（20.8%），声4（16.7%），気持ち4（16.7%），緊張3（12.5%），時3（12.5%），5歳児2（8.3%），一緒2（8.3%），給食2（8.3%），話2（8.3%），ピアノ2（8.3%），会話2（8.3%），保育所2（8.3%）という結果が得られた．そこで，共起するカテゴリを有向レイアウトで表示して視覚化し，結果の傾向を把握したところ，子どもと気持ち，子どもと自分，子どもと保育者は共起頻度が高く，関連性が強いことが明らかになった（図1）．

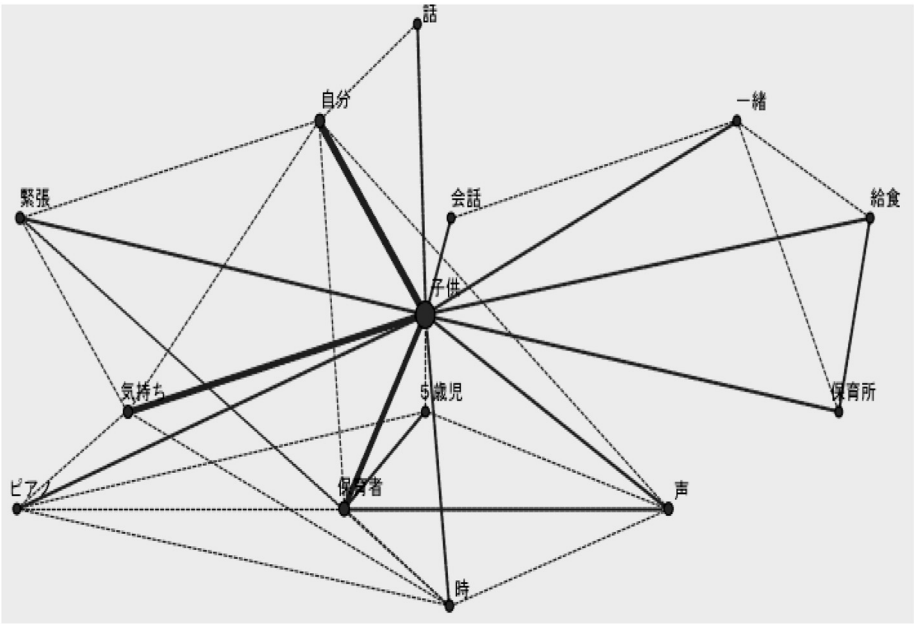

図１　有向レイアウトによる保育基礎講座前半と保育体験１回目の学びの特徴

保育基礎講座後半と保育体験２回目の学びの特徴を把握するため，自由記述式のテキストデータを定量化したところ，子ども 18（75.0%），先生 7（29.2%），絵本 7（29.2%），保育所 4（16.7%），保育士 3（12.5%），自分 3（12.5%），ご飯 3（12.5%），今回 3（12.5%），活動 3（12.5%），ところ 2（8.3%），前 2（8.3%），2 回目 2（8.3%），中 2（8.3%），一緒 2（8.3%），時 2（8.3%），声 2（8.3%），話 2（8.3%），ゴムとび 2（8.3%），みんな 2（8.3%），笑顔 2（8.3%），方 2（8.3%）という結果が得られた．

そこで，共起するカテゴリを有向レイアウトで表示して視覚化し，結果の傾向を把握したところ，子どもと絵本，子どもと先生，子どもと活動，子どもとゴムとび，子どもとご飯，子どもと今回は共起頻度が高く，関連性が強いことが明らかになった（図 2）．

保育基礎講座と保育体験の１回目と２回目の学びの定量化を行い，有向レイアウトによる学びの特徴の検討を行った結果，１回目は，子どもと気持ち，子どもと自分，子どもと保育者の関連性が強かった．それに対して，２回目は，子どもと絵本，子どもと先生，子どもと活動，子どもとゴムとび，子どもとご飯，子どもと今回が関係性の強い結果が示された．

このことから，保育基礎講座前半と１回目の保育体験後の学びの特徴は，子どもの気持ち，子どもと自分，子どもと保育者についての学びであることが示唆された．また，保育基礎講座後半と２回目の保育体験後の学びの特徴は，絵本の読み聞かせや先生の子どもへの関わり，ゴムとびやご飯の場面での活動など具体的な学びであることが推察された．

川谷ら（2005）は，子育て支援ボランティア活動における大学生の学びの過程を分析し，回

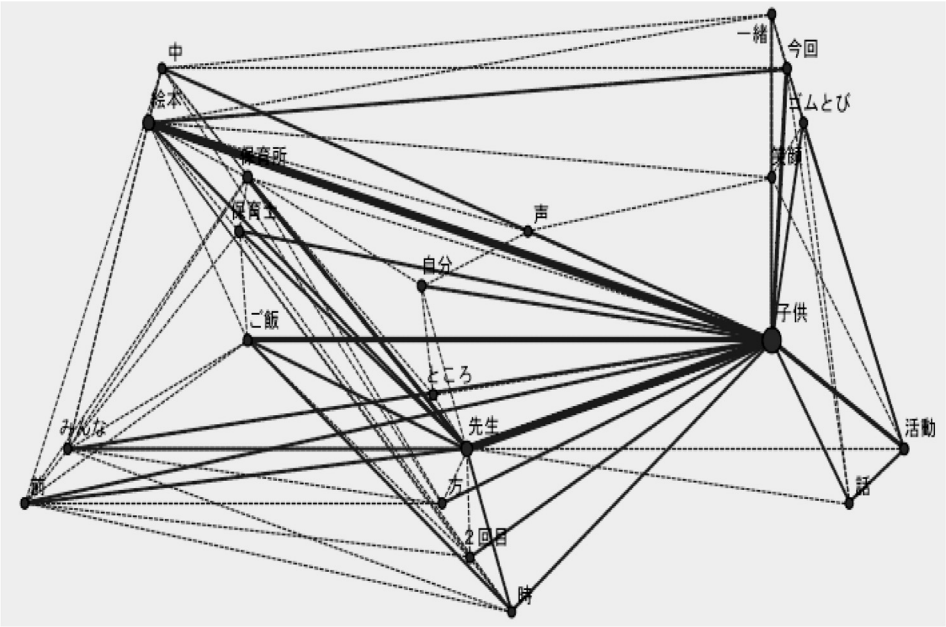

図2　有向レイアウトによる保育基礎講座後半と保育体験2回目の学びの特徴

数を重ねるに従って，観察（客観・分析・批判）したことの記述が減少すると述べている．それに対し，情報収集，母子への共感，自分なりの課題意識，自分なりの試みとその評価が増えていくことが全体に共通し，対象者との関係性を広げていくという学びの過程を研究によって明らかにしている．本研究においても，保育基礎講座を基盤とした保育体験を行うことによって，絵本の読み聞かせや先生の子どもへの関わり，ゴムとびや給食の場面での活動など，具体的な保育実践について自分なりの課題意識を持って試みる姿が見られるようになった．そして，自らの実践の評価をすることによって学びを行っている実態が明らかになった．

次に，テキストマイニングの結果，得られた知見に基づいて内容を分析するため，共起している逐語記録を抽出することによってデータに基づいた保育基礎講座と保育体験の学びの検討を試みた．

まず，保育基礎講座前半と1回目の保育体験後の学びの特徴について検討した．

子どもと保育者に関する学びとしては，「①観察して学んだこと」の中の「保育者が子どもたちに話すときに，とてもはきはき話していることを学んだ」と，「③自分なりの課題意識を持つようになったこと（もっと～を知らないといけないなど）」の中の「保育者が，園児に話す時に優しい言葉かけだった」があった．

また，子どもの気持ちについての学びとしては，「③自分なりの課題意識を持つようになったこと（もっと～を知らないといけないなど）」の中の「子どもはどうしたら喜ぶのかなど子どもの気持ちをもっと知らないといけない」と，「⑤自分なりの役割意識が広がったこと（～

もできるように頑張ろうとおもうなど)」の中の「ピアノもうまくなりたいし，子どもの気持ちも分かってあげたい」と，「子どもの気持ちを考えすぎて結局何もできなかった」があった．

そして，子どもと自分についての学びとしては，「④自分なりの試みとそれを評価するようになったこと（～をしてみたらうまくいった)」の中の「自分からどんどん話しかけるようにしコミュニケーションをとるようにしたら，子どもの方からも話しかけてくれて仲良くできた」と，「自分から話しかけるようにすると，あまりしゃべらない子どもたちも話をしてくれるようになった」があった．

これらの結果から，保育者が子どもたちに話す時には，わかりやすく伝えていることを観察によって学び，保育者が園児に話す時に優しい言葉かけをすることについてもっと知らなければいけないという自分なりの課題意識を持つようになったことがわかった．また，子どもはどうしたら喜ぶのかなど子どもの気持ちをもっと知らないといけないという自分なりの課題意識を持つようになったこともわかった．さらに，自分からどんどん話しかけるようにしコミュニケーションをとるようにしたら，子どもの方からも話しかけてくれて仲良くなれ，自分から話しかけるようにすると，あまりしゃべらない子どもたちも話をしてくれるようになったという自分なりの試みと評価の実際が明らかになった．そして，子どもの気持ちを考えすぎて結局何もできなかったという反省に加えて，ピアノもうまくなりたいし，子どもの気持ちも分かってあげたい，頑張りたいという意識の高まりと自分なりの役割意識の広がりが明確になった．

次に，保育基礎講座後半と2回目の保育体験後の学びの特徴について検討した．

子どもへの絵本の読み聞かせについての学びとしては，「①観察して学んだこと」の中の「2回目の来園であり，慣れてくれているのか子どもたちから話しかけてくれることが多く，楽しく絵本を読むことができた」や「絵本を読み始めたら，みんな集中して見ていた」があった．また，「③自分なりの課題意識を持つようになったこと（もっと～を知らないといけないなど)」の中の「今回の絵本（あめふりくまのこ）の読み聞かせで，絵本の中の歌を調べていなかったので，子どもたちと一緒に歌うことができなかったことを反省している」から，子どもたちが集中して絵本を見て，自分も楽しく絵本を読むことができた反面，絵本の中の歌を調べていなかったことから，子どもたちと一緒に歌うことができなかったという反省をしており，保育実践に関して具体的かつ，自分自身の課題として深く学んでいる実態が明らかになった．

さらに，「④自分なりの試みとそれを評価するようになったこと（～をしてみたらうまくいった)」の中の「絵本を読む声が聞こえやすいように声をなるべく大きくするようにしたが，怖がらせないように声を抑えることも考えた」などの記述や「いろいろと考えながら絵本を読むようにした」からも，絵本を読む声が聞こえやすいように声をなるべく大きくするようにしたという一定の評価をしながらも，怖がらせないように声を抑えることも考えたなどと様々な工夫をしていたことを思い返していた．このように，絵本の読み聞かせの場面での学びを具体的

に振り返っていることがわかった．また，他に「④自分なりの試みとそれを評価するようになったこと（～をしてみたらうまくいった）」の中の「間違えないようにと思い，子どもたちに絵本を読む練習を前日に何度も繰り返したので，すらすらと読めた」から，2回目の保育所見学前に事前に準備していたことと，その努力から，上手く課題に取り組めたと達成感を感じていることが明確になった．

そして，「⑥将来の保育分野への職業生活や進路選択への興味・関心の高まりである）」の中の「今はまだ保育所の先生ではないが，先生になったらもっと楽しく絵本を読むことができるのではないかと考えた」から，保育士になってからもっと楽しく絵本を読むことができるようになるのではないかという期待感を高めていることがわかった．

先生の子どもへの関わりの学びとしては，「①観察して学んだこと」の中の「子どもがご飯をこぼした時に，保育者が悲しい顔をした絵を見せ『先生は悲しいよ』ということを子どもたちに伝えていた」から，保育現場で保育士が子どもたちとコミュニケーションを図る際に用いられる非言語レベルのコミュニケーションに対しても見逃さずに，観察して学んでいることが明らかになった．

また，「②子どもの成長をともに喜んだりして学んだこと」の中の「子どもたちは，先生の話を聞いて活動することが分かった」と，「給食を運ぶ時にこぼしてしまい，2回目のご飯を運ぶ時は先生に言われたように前を向いて持っていたので，子どもたちが学んでいるなと思った」から，保育士の先生方の語りかけから子どもたちが学び，成長している姿を観察して学んでいることがわかった．

さらに，「⑤自分なりの役割意識が広がったこと（～もできるように頑張ろうとおもうなど）」の中の「保育所の先生を見て，叱るところは叱っていたので自分自身も叱るときには頑張って叱るべきだと思った」から，保育士の先生が子どもたちに対して，時にほめ，時に叱るというメリハリのある関わりについて観察を通して学び，それを自分の将来の課題として意識を高めていることが示唆された．そして，「⑥将来の保育分野への職業生活や進路選択への興味・関心の高まりである」の中の「保育士になって，子どもたちがいろいろとできるようになったり成長していく姿を見ていきたいと思った」からも子どもたちの成長，発達につながる支援をしている保育士の職業理解を深めていることが推察された．

ゴムとびでの活動の学びとしては，「②子どもの成長をともに喜んだりして学んだこと」の中の「成長を見れるほど子どもたちのことをちゃんと見ることはできないが，一緒に笑い合ったりゴムとびの活動では応援したり，すごく楽しく，子どもたちも可愛くて，すごく嬉しかった」から，ゴムとびの活動場面で，子どもたちの成長までは見れないものの，ともに応援したり，喜びを共感していることがわかった．

また，「⑤自分なりの役割意識が広がったこと（～もできるように頑張ろうとおもうなど）」

の中の「子どもたちとのコミュニケーションをもっと取れるようにしようと思った．今回はゴムとびの活動で側転の上手い子がいたので，そこから習い事の話などをして名前を聞いてみたりした」から，具体的に名前を聞いたり，習い事の話をしたりして，子どもたちとコミュニケーションを図るように努力していることが明らかになった．

木内ら（2014）は，実習外教育への参加を通して，学生が具体的な課題を捉え，解決策の提案をする記述が見受けられたことを報告している．この点においても，本研究によって保育基礎講座を基盤とした保育体験を行うことで具体的な保育課題を各自が設定し，今後，保育の専門職として就労していく上で必要な知識・技術について自分なりに記述していることが明らかとなった．そして，子どもたちの成長・発達を支援する専門職への志向を高め，職業意識を向上させていることが示唆された．

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究においては，高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験の１回目と２回目の学びの定量化を行い，有向レイアウトによる学びの特徴の検討を行った．

結果として，保育基礎講座前半と１回目の保育体験後の学びの特徴としては，子どもの気持ち，子どもと自分，子どもと保育者という観点から学んでいた．また，保育基礎講座後半と２回目の保育体験後の学びの特徴としては，保育体験によって，絵本の読み聞かせや先生の子どもへの関わり，ゴムとびや給食の場面での活動という観点から具体的な保育実践について学んでいた．そして，分析によって得られた知見に基づいて内容分析を行った．その結果，保育基礎講座後半と２回目の保育体験後の学びの特徴には，保育基礎講座前半と１回目の保育体験後の学びの特徴に見受けられなかった具体的な保育実践に関する学びが確認された．

しかし，本研究で扱ったデータ数が少ないことに加えて，本研究においてはテキストデータ分析とそれに基づいた内容分析にとどまっているという課題がある．そのため，本研究から得られた成果を一般化することはできず，その点において限界がある．日和（2013）は，テキストデータ分析を用いた研究に関して，テキストマイニングを単独で用いるのではなく，従来の質的研究方法を併用することによって，より多角的な分析ができると述べている．それゆえに，常にデータに戻りながら，テキストデータ分析から得られた結果の意味を吟味・再考する質的研究を併用する必要がある．そして，引き続き地道にテキストマイング手法によるデータ解析を行うとともに，量的研究に取り組むことも今後の課題となる．

＜文献＞

大学間連携 GP 事務局代表校佐賀女子短期大学（2014）『文部科学省平成 24 年度「大学間連携共同教育推進事業」採択短期大学士課程の職業・キャリア教育と共同教学 IR ネットワーク事業報告書〈平成 25 年度版〉』昭和堂.

第 7 期中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ（2014）「短期大学間の連携・共同による教育の展開―短期大学コンソーシアム九州の事例―」『中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ＷＧ（第 2 回）』H26.1.30

川谷和子・伊藤篤（2005）「子育て支援ボランティア活動における大学生の学びの過程分析（２）－基準カテゴリを使った学びの過程分析結果―」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第 11 回こうべ大会』44-45.

木内菜保子・森薫・佐々木由美子・小林久美（2014）「効果的な実習外教育についての一試論」『東京未来大学研究紀要』7，55-65.

木内菜保子・森薫・佐々木由美子・小林久美（2013）「東京都内における保育者・教員養成大学の学生ボランティアの現状」『東京未来大学研究紀要』6，33-40.

春高裕美・青山優子・白澤早苗・谷口幹也・中山智哉・城佳世・大迫秀樹・古城和子（2014）「九州女子大学における学生ボランティア事業の現状と課題 ～幼稚園・保育所グリーンティーチャーの派遣～」『九州女子大学紀要』51（1），25-38.

日和恭世（2013）「ソーシャルワーク研究におけるテキストデータ分析に関する一考察」『評論・社会科学』106，141-155.

伊藤篤・川谷和子（2005）「子育て支援ボランティア活動における大学生の学びの過程分析（１）－学びの内容を分析するための基準カテゴリを確定する方法―」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第 11 回こうべ大会』42-43.

文部科学省（2013）「高等学校と大学との連携の状況」『「高等学校教育と大学教育の連携強化」に関する参考資料　資料３－２』